

テーマ：本と書体のはなし

講師：書体設計士 鳥海 修氏

令和元年8月26日（月）東京都立中央図書館において開催されたTLA講演会を再構成してまとめたものです。

○ はじめに

鳥海です。よろしくお願いいたします。

僕、書体をつくっているんです。それで、今ここへ入ってきて一番最初に目についたのはこの横断幕です。（笑）



この書体、わかります？

これはMSゴシックです。Windowsに入っていて、新しいWindowsにも入っていますが、今は弊社（有限会社字游工房）の「游ゴシック」が最初に出てくることになっているので、このMSゴシックを使っているということは、ちょっと古いWindowsを使っているということかな…。（笑）

「書」の中の空間が狭いですね。そのせいで、こっちの「はなし」と比べると、太く感じませんか？

ということは、これは機械的に等幅に太めているんです、パソコン上で。だから、本当はMSゴシックって、もうちょっと細いんですよ。

Windowsを使っている人はわかると思います

が、太め処理という「B」のボタンを押すと、急にこれが太くなるんです。

これは私たち文字を作る側からみれば冒涇なんですよ。（笑）

だって、ちょうどいい太さで平仮名と、漢字と、片仮名を作っているわけですから、それを機械的に太くしてしまえば、同じ太さに太くなってくるんですよ、数値的に。太くするときは、本当は仮名のほうをもっと太くしないと合わないのです。

この横断幕を作った人に文句を言っているわけじゃありません。（笑）Windowsの仕様に文句を言っています。

1 令和の「令」と明朝体

さて、令和になりました。この令和が発表されたとき、皆さん、「あれ？」と思いませんでしたか？

令和の「令」の最終画、何で縦なの？ どうして縦なのと。

どうして縦だと思いますか？

令和の「令」という字は、小学4年生の教育漢字です。小学4年生で「令」という字を学びます。書くときはカタカナの「マ」の形で教わってきたと思います。だから、筆で書くときに縦で書くのは、ちょっと違和感があります。

これが発表されたときに、すぐNHKから電話がかかってきました。弊社では答えませんでした。親会社のモリサワが答えたようです。そのことを受けてだと思いましたが、NHKでも新聞でも

どっちでもいいと言っておりました。

どっちでもいいんですよ。確かにどっちでもいいんだけど、小学生がこの縦を書くのはよくない。

「マ」で教わっているのだから。

それが令和が発表された翌日のツイートで見たのですが、小学生がこの「令和」という文字を習字で書いて、先生を囲んで、みんなで写真におさまっているんです。それが全部、縦線なんです。



だけど、どっちでもいいんです。(笑) ややこしいね。字はこんな感じなんですよ、ややこしくて。

今、新聞などの活字はみんな縦なんですよ。

何で活字は縦にしたかという、康熙字典^{こうき}という、清朝に中国でできた字典があるんです。その康熙字典は5万字ぐらい収容されているんですけども、親字が明朝体で初めてつくられた辞書なんです。

日本は、明朝体でつくられたこの康熙字典の文字をベースにしていますので、活字は明朝体もゴシック体も全部縦にしています。

何で縦にしたのかなど。どっちでもいいんですよ。しつこいようだけど。(笑)

明朝体やゴシック体だとこんな感じになるんですよ。

活字って、四角の中に書くじゃないですか。ところが、「マ」に書くと、文字が小さくなっちゃうんですよ、四角の中のひし形に入れるから。これは「今」という字もひし形で、すごく小さく見え

る字です。「今」は「今」でこのまま生きていますけれども、「令」はこれを縦にして活字として生き残っている。



だから、おそらく元号が「令和」と決まり、この額を書いてもらうときに、おそらくどなたか偉い人が書家のところに「令和」と印刷した活字体を持っていったのでしょうね。

それでその書家さんが「マ」で書こうとしたんでしょう。もしかしたら「マ」で書いたかもしれない。で、頼んだ人が、「いや、ちょっと待ってください。『マ』はやめて、縦にして、活字みたいにお願いします」と言ったのではないか——これはあくまで想像です、念のため。

こういうことをやっちゃだめなんだよ、と僕は思っています。

そうしたら、これはモトヤという老舗の活字メーカーなんです、大阪にある私たちのライバル会社で美しい楷書のフォントを持っています。

この「令和」の「令」が縦で発表された翌日か次の日だったかな、ちゃんと美しい「マ」の「令」があるにもかかわらず、この縦棒の「令」をつかって無料配布したんです。

よくない。(笑)

何で僕がこんなによくないと言っているのか。

まずは資料を見てみましょう。小学校の教科書では、4年生で学ぶ漢字にこの「令」があります。



それから、これは書道字典といって、歴代の立派な書を集めたものなんです。



楷書から始まって、隷書になっていって、草書になっていって、それでここから隷書になっていきます。隷書になって篆書になります。それで甲骨文文字になっていくというようなことを示している辞書です。この楷書は縦ですね。これは「マ」ですね。このように両方あるんです。両方あるから、歴史的に見れば、この文字が縦だから間違いということはないです。ただ、小学生とかはやっぱり

教えられたとおりに書こうとすれば「マ」でしょう。

石川九楊さんという書家の方をご存知でしょうか。僕は聞いていないのですが、先日、講演をなされたらしいです。石川九楊さんは、書き方に2つの書き方があるような文字は元号にふさわしくないと言っていたらしいです。賛成です、賛成。

なぜ僕がこれを怒っているかということ、フォントの「総数見本」を見てください。



今、フォントの文字は全部で2万3,000字入っています。その中に1万4,500の漢字が入っています。1書体にですよ。はじめに触れたMSゴシックという書体もほぼ同数の文字が入っていることになります。

小学生が習う教育漢字は1,026文字です。それで、常用漢字、新聞などで使っていていいと言われているのが2,100文字ちょっと。だから、新聞を読んでいるときには、皆さんは多くても2,100字ぐらいの漢字しか見ていないわけです。

何でそんな1万4,500もの文字が必要なのかと
いうと、これです。

令：(令)

それは戸籍、手で書いていた時代の戸籍なんです。手で書いているときは、昔、おじいちゃんとか、みんな字がうまかったので、楷書できちんと書くことなんかしません。行書や草書で書いたりしたんだと思います。

そんなことで、こうやってちょっと何か変なことがあると、文字が増えるんです。コンピュータの時代はどっちでもいいというわけにはいなく

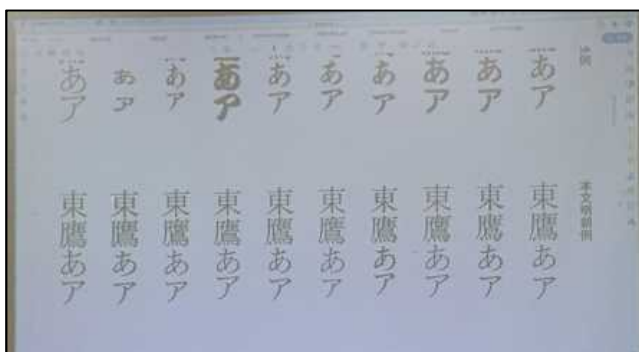
て、2つ文字が出てきたら、必ずそこにコードが振られます。そのコードによってその文字を出力することができることになるので、「令」の字も増えるんじゃないかと思って、ドキドキです。

2 書体の歴史と特徴

次に、書体の歴史と特徴についての話です。

書体にはいろいろあります。書体を大きく分けて「見出し書体」と「本文書体」というものがあります。「見出し書体」はタイトルとかで、「本文書体」は文章を読むためのものです。

「見出し書体」、上の段の右から、明朝体。角ゴシック体、単に「ゴシック体」と言ってもいいですが、「角ゴシック体」と呼んでいるところもあります。3つ目が丸ゴシック体。4つ目は楷書体。5つ目が行書体。6つ目は教科書体。



これ（左から4番目）は皆さんよく知っているでしょう。何でしょうか。

（フロア：「寄席や歌舞伎のときに見ます。」）

そうそう、寄席文字に近いんですけど、これは実は勘亭流といって、歌舞伎の看板に使うものです。ただ、歌舞伎の看板はみんな手で書いているので、こういうフォントは使っていません。

例えば、築地の歌舞伎座の勘亭流と、京都の南座の勘亭流は、スタイルが違います。大阪も違います。

大阪の人は、築地の勘亭とかを見ると、あんなのは勘亭じゃない、と昔は言っていたそうです。今はわかりませんが…。

これ（左から3番目）は明朝体ですけれども、昔々の明朝体の最初のころの復刻みたいなものです。

これ（左から2番目）は隷書体。どういうわけか、日本人がすごく好きな書体です。

それで本文用書体には、明朝体、ゴシック体、それぞれあり、さらにそのほかの書体もいっぱいありますが、今は明朝体だけ挙げてみました。下段です。

書籍に現在一番よく使われている書体は、ちゃんと数えたことはありませんけれども、おおよそこのあたりかなと思っているのが、右から2番目（リュウミン）と5番目（イワタ細明朝）です。

それから、左から5番目（ヒラギノ明朝）は講談社。文芸春秋は左から3番目（凸版文久明朝）。そして、新潮社は左から2番目（秀英細明朝体）です。

岩波書店は精興社という会社の、精興社明朝というフォントを使っていますが、販売されていないので、私たちにはこのフォントが手に入らず、ここでは再現できないのです。

デジタルデバイスにおいては、横線の細い明朝体は不利です。なぜならば、解像度の関係で横線がうまく表現できないからです。スマホやパソコン、タブレットとかは、みんなゴシックでしょう。それは、デジタルデバイスの解像度が低くて、ゴシックのほうが見やすいからです。

特に初期の頃は、本当に画質が粗かったので、明朝体を再現するには機能不足でした。そのときからゴシックが用いられてきて、今でもゴシックが当たり前に使われているということです。

ただ、ここで気になるのは、横組みだということです。今は、ほぼ全部、横組みで見ているでしょう。

横組みなのか、縦組みなのか。

日本は明治以来ずっと、いや、明治以来どころか、そのもっとも昔、平安時代から縦に文字を書いていたわけです。その文化がここへ来て崩れつつあると思います。

その要因はシステムが横組みに向いているということと、それを助けているのがゴシックです。

例えば、明朝体の漢字って、横が細く、縦が太いでしょう。それで点はこうやって筆で書いたような形にしていますけれども、結構、幾何学的なんです。

「東」の字を考えてください。横線が細くて縦線が太い。それで左払い、右払いに太・細がある。

これに合う平仮名はこれなんです。みんな、おかしく感じないでしょう。



実はこの平仮名、明朝体とは別のスタイルなんです。だって、明朝体の漢字と同じようなスタイルで書こうとしたら、「あ」の一画目の横線は漢字の横線のように水平の線でいいわけでしょう。だけど、実際はこういう抑揚がついています。だから、この平仮名と漢字のスタイルは違います。断言します、違うんです。

ゴシックだということです。これだと同じスタイルに見えますね。



例えば「東」とか「あ」とか見たら、同じだなと。「鷹」は横線がいっぱいあるので、太さ調整かしていますけれども、同じ画数ぐらいの漢字と平仮名を比べると、同じに見えるかなみたいな感じで作ってるわけです。

ところが、明朝体は違います。

日本の明朝体は、とても特殊なんです。

日本語表記というのは、平仮名、片仮名、漢字、そしてアルファベットから成り立っています。

漢字は中国から入ってきたことはご存知と思います。仮名は、その漢字を単純化して仮名になったわけです。平安時代に漢字の「安」という文字が「あ」となっていくのですけれども、これがこうの、こうの、こうの、こんな感じで崩れていって「あ」になっていくわけです。



「ありがとう」とかって連綿で書くような書き方が平安時代に生まれてくるわけですが、はじめは、この音のところに無理矢理漢字を充てるということをやったわけです。こんなふうにおそらく充てていった。

これが万葉仮名なんですね。これは日本の一大発明なわけだけでも、発想自体は、朝鮮半島の人たちから教わったという説が有力です。

このように漢字を単純化していったことによって、美しい仮名書道がつくられていったわけですが、明治のはじめに活字が中国から入ってきます。中国から入ってきた明朝体は、金属活字として、四角の枠の中に入っていた漢字でした。それに合う仮名をつくらなくちゃいけないわけで、連綿した文字を切り離すわけです。

ただ、切り離してはみたものの、線は、漢字に比べて細く、縦に流れていこうとする形でマッチしません。結局、四角の枠の中に漢字の太さに合わせて、それまでにはなかった一つ一つの文字が独立した仮名をデザインしました。それが、現在の楷書のようなデザインです。

つまり、幾何学的な漢字と楷書みたいな仮名を組み合わせることによってできているのが明朝体。この明朝体は、仮名は筆で書くということを前提にしているので、この連綿体みたいな流れが常にあって、縦に読むときにとても都合がいいのです。目が流れるんです。

ところがゴシックは、同じ太さだからその流れがないんです。だから、止まっているように見えるので、横に組んだときはゴシック体のほうが都合がいいということもあって、タブレット等はゴシック体になっているのではないかなと思います。

明治2年に中国から漢字が入ってきて、その漢字に合わせるために、日本の職人さんが大変苦労

して30年ぐらいかかって仮名のスタイルをつくり上げます。夏目漱石の小説が売れ出した頃は、この明朝体でした。

それ以来、印刷で読む本のほとんど全てと言っていいくらい明朝体で組まれています。

なぜこんなにスタイルの違う——スタイルが違うというのは、漢字、平仮名、片仮名、アルファベットというその4つの文字のカテゴリーのデザインがみんな違うものが組み合わさっている書体が何でこんなに長く支持されるのだろうかというのは本当に不思議で、大学生などが研究してくれないかなと思っています。

ただ、僕の中では少しは結論めいたものがあって、漢字は中国から来たもので漢語を示す、平仮名は和語で日本の言葉を示す、そして片仮名は外来語を示す、アルファベットは外国の原典を示す、という役割分担が一番よくデザインされているのがこの明朝体ではないかというように思っています。

例えば、岩波文庫とかよく読んでこられた人は、漢字を拾い読みするだけで何となく意味がとれたというようなことがありましたね。

今は漢字が使用制限されていて、仮名の使用頻度が増えています。

だから、業界用語でいうところの「開く」という、漢字にしないで仮名にするということが多くなってきて、仮名の使用頻度が上がっています。同時に漢字の使用頻度が下がることになりますから、漢字だけ拾い読みしても、ちょっと意味が通じないということがあるかもしれません。ただ、熟語などは、漢語として残っているし、意味がとりやすいということでこの明朝体という書体が支持されているのではないかなと思っています。

ところが今日、デジタル時代になって、先ほどお話ししたようにゴシック体の横組みというものが

多くなってくると、「果たして明朝体の運命やいかに」という感じがします。

皆さんは明朝体、好きですか。明朝体、好きという人？ あまり好きじゃない人？ 一名いますね。

学生の中には「明朝体は怖い」と言う人がいます。怖いじゃないですか、ちょっと。何か厳めしいというか。怖いお父さんを見ているみたいな。ちょっと肩を怒らした、何か変なことを言うときを落とされるような面倒くさいお父さんみたいな感じがするのかな。

最近、みんな「かわいい！」って言うじゃないですか。それからすると、明朝体にはかわいさというのはないのかもしれないですね。

それはさておき、中国で生まれた漢字と、日本で生まれた平仮名と、漢字の半分だけとった片仮名と、それからローマで生まれたアルファベットをバランスよく組み合わせるためにデザインするというのは、結構大変なんです。

3 本のはなし

では、ここから本の話をしていきましょう。

本はどういうふうに進展してきたかです。これは鎌倉時代の『源氏物語』で、写本です。手で書いていました。

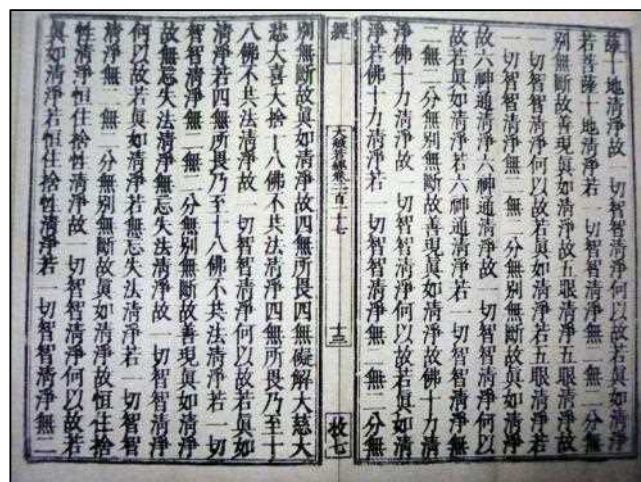
能書家と呼ばれる人たちが、誰かからお願いされて、きれいに手で書いて、そんなに部数はつくれないですから、それをおそらく当時の天皇とかに献上していたんじゃないかと考えられます。

これは江戸時代の初めに日本に渡ってきた一切経というお経です。経典。

これが明朝体の漢字の初めと言われています。中国の明代だから明朝体なんですけど。

この中に一切経をご存知の方はいますか？

(フロア：「名前は知っていますけど、中は見たことないです。」)



これは黄色い紙に墨で刷ってあって、墨で刷るというのは木版なんです。

それで、今、映している1ページ分の大きさの木の板に彫られています。京都の宇治に黄檗宗^{おうぼくしゅう}大本山萬福寺というお寺さんがありまして、その宝蔵院（収蔵庫）に行くと、300 円の入館料でこの版木が見られます。

その版木の数たるや6万枚という壮観さです。体育館みたいなところに、版木が1階と2階にずら一とあるんです。

今、全部は刷っていないんだけど、大般若經、全600巻で、たしか350万円から700万円くらいします。装丁によって価格が違います。今でも矢野さんという方が一人で刷っているんです。

この人、すごいんですよ。編集者をやっていた人なんですけど、偉ぶらず、自分はだめなんですと言うような人なんです。

その人がものすごい知識を持っています。字を書かせてもとてもうまいのが、メモを見るとわかる。矢野さんに質問をすると、とても熱心に答えてくださいます。

僕が学生を連れていったのは冬の寒い日でした。床はコンクリート張りで、暖房のないところで、矢野さんはいっぱい着込んでいるんです。一方、我々は昔のトイレにあったようなビニール製の薄いスリッパを履いて見ているわけです。そこで、

「矢野さん、ちょっとお話を聞かせてもらえますか」と言うと、「わかりました」と言って、そこからとても熱心にお話してくださいます。

すでに足の感覚がなくなるくらい冷たくなっているのに、僕もまた質問をするものだから、学生が「先生、もう堪忍して」という視線を送ってきます。もう身体が冷え切って足先が動かなくなっちゃって、歩くとスリッパが飛んでいくんですよ。

(笑) 本当に。それぐらい話し好きです。ぜひ1回行ってみてください。

もう一つ、面白い話をしましょう。

日本ヘラルド社が、昔、^{てつげん}鐵眼禪師の話で、『鉄眼』という映画を製作しています。

ヘラルド社から『鉄眼』^{※1}という本も出ています。すごくおもしろい本。この都立中央図書館にもありますね。

この鐵眼という人は、熊本出身の人で、僧侶になるわけですけど、萬福寺に入るんです。

それで、京都が飢饉や洪水とかに見舞われて、多くの人が命を落としたことがあって、それで仏教の力で何とか救えないものだろうかと鐵眼は考えたわけですね。

それで、仏教の力で救うには、経典が大事だと思って、その経典を自分たちが版面にしていっぱい復刻して日本国中に広げようとしたんです。

それで、その経典というのが、結局6万枚の版木になるわけですが、それを当時のお奉行かお殿様だか忘れましたが、吉野の桜を切っちゃいけないんだけど、それを切っていいよという許可を出して、それでその吉野の桜を使って6万枚の版木を作るんです。

鐵眼は、事業を始めるために募金を呼びかけるわけです。現代のようにネットなんてありませんから、辻に立って、鉄鉢をおいて法話をして寄付を募るわけです。

そんな時、鐵眼の前を足早に通り過ぎる武士に後から声をかけ、一文の寄付をお願いします。武士は鐵眼に怪訝な視線をおくり、振り向いてまた足早に先を急ぎます。鐵眼は追っていきます。武士が茶屋に入り一服したところに、鐵眼が追いつき、寄付をお願いします。呆れたやつ、と思いつつ武士は一文を鐵眼に投げ与えます。

それを鐵眼は押しいただいて、「ありがとうございます」と、ものすごく熱心に御礼を言うわけです。

そうすると、その武士が「おまえ、なぜたかが一文のためにこんなに追いかけてきて、そんなに俺に頭を下げるのか?」と問われると、鐵眼は、実はこれこれこういうことで、今、こういうことを始めたい。ついては一番最初に寄附をしてもらおうと思ったのが、あなただった。あなたから寄附をしてもらわなかったら、この事業は成り立たないと思った、ということを答えました。武士はその考えに打たれ、後にその事業を支える人になります。どうですか。映画を見たような感じになっちゃったでしょう。(笑) ちょっと前に読んだ話なので、少しずれているかもしれませんが。(笑) 大体こんな話です。

でも、集めたお金は、また飢饉とかあって、炊き出しとかにお金を使って、使い果たしちゃって、それを3回繰り返しています。3回目でやっとこの事業が成り立ったという。だから、これを「鐵眼一切經」というんです。

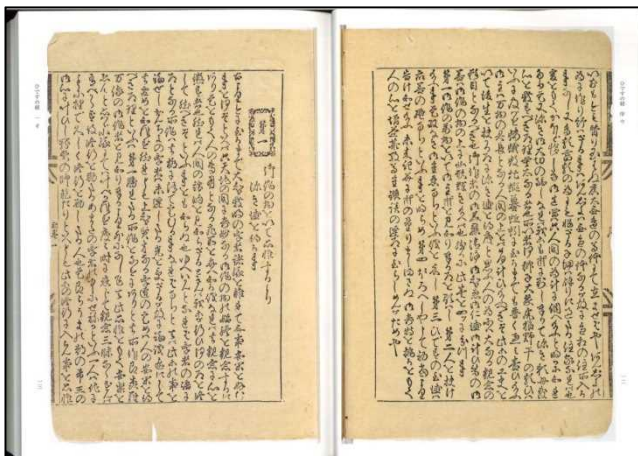
黄檗宗を開いたのは、豆のインゲン、インゲン豆を持ってきたと言われている^{いんげん}隱元禪師というお坊さんです。この隱元禪師が中国から持ってきた万歴版という一切經、それをみんなばらばらにして、ばらばらにしたものを版木に裏返しに張って、それで上から彫っていった。だから、もともとのやつは、もうないんです。

ただ、中国にも本物はあるし、日本にもどこかに本物はあるみたいです。やっぱり本物のほうがきれい。鐵眼版のほうが読めるのは読めるけど、本物と比べると、やっぱり見劣りします。でも、そういうことがありました。

この一切経が最初の明朝体。これは仏教です。

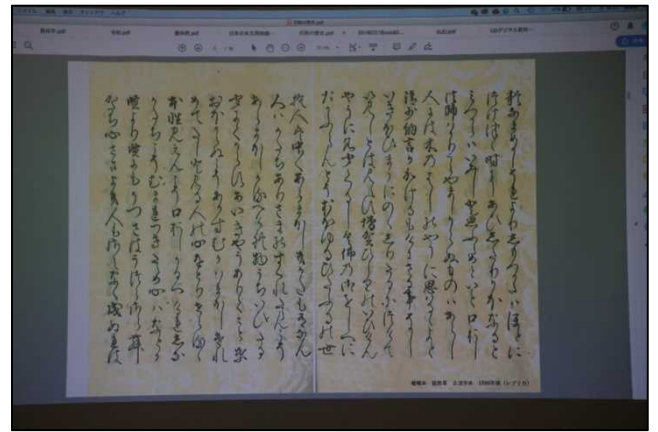
次の「ひですの経」は、何と同時代ぐらいにつくられた活字の本です。活字のキリシタン版。これはキリスト教です。

文字と宗教というのはものすごく結びついていて、そのあたりからどんどん文字が入ってきて、いろいろ改良されて、それで今読んでいるような一般の普通の出版に広がってきた。



この「ひですの経」もすごいですよ。これ、活字ですよ。この活字、横に並んでいないじゃないですか。普通、活字は、田んぼみたいに同じ四角で組まれているから、横に並びます。ところがこれは全然並んでいないということは、平べったい活字があったり、長い活字があったりしているんですね。変体仮名だらけですよ。

これは、僕が大好きな嵯峨本「徒然草」のレプリカです。世界で最も美しい活字本と言われていて、これも江戸時代初期のものです。



この話もいいんですよ、なかなか。

これはレプリカですけど、これは木に彫った木活字というものです。

これの優れているのは、実は活字の大きさに単位があって、その整数倍なんです。

例えば、1行目の後から4文字目の「ハ」。これが1単位です。そのまま4行目に視線をずらすとそこにも「ハ」、これも1単位。この単位が基準になって活字が設計されているから横に並ぶんです。5行目の「人には木のはしのように思はるゝよと」の「人」は1単位、「には」は倍の2単位、少し下について「思はるゝ」は3倍の3単位になっています。おそらく4単位くらいまであるのだと思いますが、このように整数倍にすることによって、行末が揃うように設計されているんですね。嵯峨本はそれをうまいこと組み合わせて文章にしているんです。

それから、すごいのは、例えば「あ」のように1頁の中に何度か出現するのですが、同じ「あ」でも活字なのに違うデザインの「あ」なんです。

嵯峨本「伊勢物語」では、これは漢字の数は幾つだったか忘れちゃったけど、あとは片仮名もないし、平仮名だけなんだけど、平仮名だけで2,000種類ぐらいあるそうです。

これを彫ったんですよ。それでいかにも手書きいたみたいにそういうスタイルにして、それでやっぱり当時の嵯峨天皇だかに献上された本みた

いです。これが嵯峨本。京都の嵯峨野のあたりでつくられた本で、嵯峨本です。

この本は誰がつくったのか。

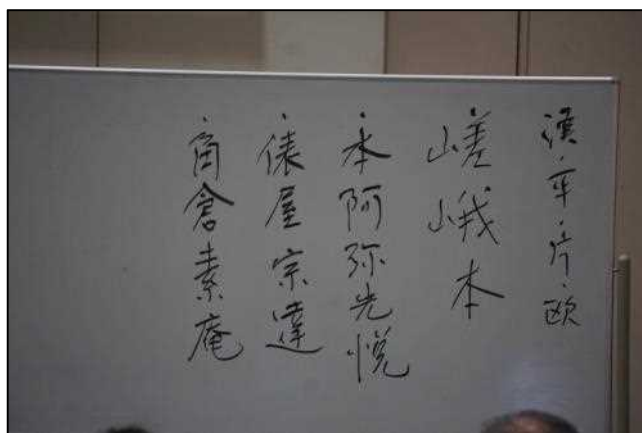
僕はこの字が好きだったのです。いや、デザインの嵯峨本が美しいと思っていて、明治以降、全部が正方形になる以前の活字がここにこうやってあるわけじゃないですか。これが日本における文章組版の原点みたいなものじゃないかなと、僕、考えて、この字を書いた人は誰だろうということを考えていたんです。

本阿弥光悦^{ほん あみ こうえつ}って知っています？ 俵屋宗達^{たわらや そうたつ}って知っています？ 角倉素庵^{すみのくら そ あん}って知っています？

この3人によってつくられたという説が一般的です。

辻邦生^{つじ くにお}という小説家の作品に『嵯峨野明月記』という小説があります。

この『嵯峨野明月記』は、この3人の独り言で構成されています。本阿弥光悦の独り言から始まるんですよ。そして、最後まで独り言なんです。そこで主役級が本阿弥光悦なんです。世間的には、一番有名な人が本阿弥光悦です。この字を書いたのも本阿弥光悦ではないかというのが一般的です。一般的というのは、一般的でない見方もあるということです。



僕は「嵯峨本伊勢物語」をベースにして、学生と一緒にフォントをつくったことがあります。「嵯峨本フォントプロジェクト」と銘打って、「嵯峨本

フォント」をつくったんです。それは今、無料で公開していますので、興味のある方はそれをダウンロードして使っていただければと思います。ただ、Wordだと文字同士がつながらなかったりして、ちょっとおもしろくない。Adobeのイラストレーターですと、ちゃんとつながります。

林進という日本美術史や書誌学を専門とする先生がいます。この林先生が、私たちが嵯峨本フォントをつくったら、資料をいっぱい送ってきました。

何だろうと思ったら、嵯峨本の研究もされている方で、僕のように文字だけとかじゃなくて、歴史的にどうなのかということをしごく細かく調べている方で、「鳥海さん、あれは本阿弥光悦ではないよ。角倉素庵だよ。」と言うんです。

角倉というのは京都の豪商です。高瀬川という運河を開拓し、琵琶湖から京都まで琵琶湖疏水を引く事業にもかかわったりとか、江戸時代、貿易が禁じられている中で、国から許しをもらってマカオとかに買い付けに行ったりしていた人なんです。超大金持ちです。

林先生の推測によると、二条木屋町、今、がんこ寿司の本店があるところですけども、その辺りに角倉の家があったのではないかと。実はその辺りの加茂川から水を引き、高瀬川が始まっているんです。

高瀬川は、大阪から船に荷物を積んで京都まで上がってくる運河だったんです。その船の航路はここで終わり、今度引き返すために船の向きを変えるところが「一之舟入^{いちのふないり}」といって、今は池みたいにとってもきれいな感じで残っているんですけども、そういうところをつくっていたわけです。それらを行ったのが角倉了以^{りょうじ}という角倉素庵のお父さんです。

角倉素庵はどういう人だったかということ、実は

ものすごく勉強熱心な人で、中国から伝わってきた文献や日本に伝わっている物語、例えば『竹取翁』とか『イソップ物語』とか、今まで手で書いて継承されてきたものを、手で書いた字、または口で伝えられてきたものは、言い回しとか細かいところで違いがいっぱい出てきますね。それを活字にして定本にしようと考え、出版を計画した。出版を計画したというのは、『嵯峨野明月記』もそうになっています。

それでさっきの嵯峨本「徒然草」ですが、背景に白い模様みたいなものが見えませんか。これは、雲母——「雲母」と書いて「きら」と読む——その模様がついています。

その模様をつけたのが、絵描き俵屋宗達です。

俵屋宗達は京都の建仁寺にある『風神雷神図』が有名ですね。

林先生いわく、この宗達と角倉素庵が嵯峨本を作った。角倉素庵がいろいろ文章の校訂とかをして、俵屋宗達が装丁、要するにデザインをしたと。文字も角倉素庵が書いたということに林先生の中ではなっています。

ところが、この嵯峨本、突然、3年ぐらいで作らなくなっちゃうんです。

『嵯峨野明月記』の中では、角倉素庵は梅毒にかかったとなっています。それで死んでしまう。でも、林先生は、ご著書『宗達絵画の解釈学』※²の中で、『風神雷神図』について、さまざまな資料や文献などの調査・分析をもとにして、独自のお考えを表しています。

林先生のお考えをごく簡単にご紹介しましょう。まず、角倉素庵は白癩という皮膚が斑紋上に白くなる病にかかったと推察しています。

角倉素庵はお金持ちだったので、嵯峨野の山奥に小さな庵を建ててもらって、そこで生涯を過ごしました。

俵屋宗達は最後に『本朝文粹』^{ほんちょうもんずい}という漢詩をはじめ優れた詩や文章などを集めた本を日本で出版したいという思いが強くあって、それを角倉素庵からいろいろな言葉をもらって俵屋宗達が実際にそれをつくるんです。それで法橋^{ほっきょう}という位を天皇から授かります。

林先生は、それ以降、宗達は絵はあまり絵を描いていないんじゃないかとお考えで、宗達が一番最後に描いた絵が『風神雷神図』と考えています。

『風神雷神図』には銘がないんです。私が描きましたという銘が。銘を書かないというのは奉納品だそうです、林先生に言わせると。それで近くの建仁寺に奉納したんだと。

その『風神雷神図』って、向かって左に白い雷神がいて、右に緑の風神がいるんですよね。それで雷神というのは、菅原道真が太宰府に幽閉されて、それで怒ってこっちの將軍か何かにたたきやってくるのが赤い雷神なんです。そういう絵も残っている。それまでは雷神はみんな赤かったんです。

ところが、宗達の描いた『風神雷神』は、白い雷神なんです。

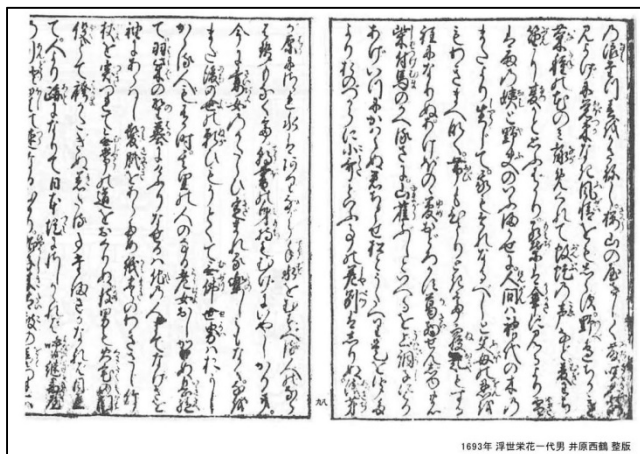
林先生は、白い雷神を病にかかった角倉素庵に見立て、それで風神は自分に見立て、「死んだ後も、自分たちはいつも一緒に天空を駆け巡ろう」という追善の思いで描いた絵であろう、というような解釈をされているんです。それで建仁寺に奉納したというのが林先生のお考えです。

超格好いいですよええ。



この本、本当におもしろい。こうやって絵を読み解くのかと思う、目から鱗が落ちる本です。ぜひ図書館で借りて読んでください。

以上が嵯峨本。

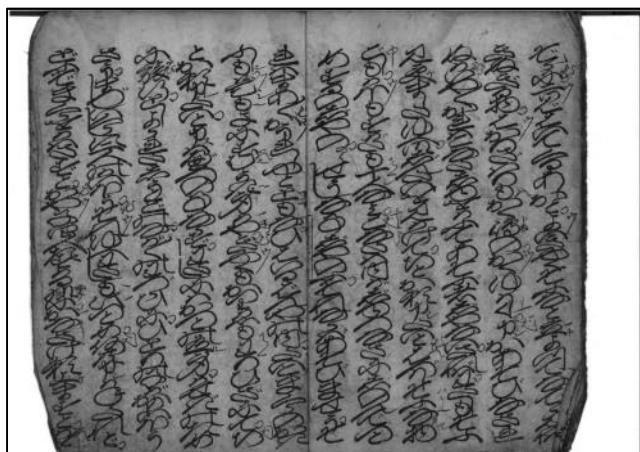


これは整版です。1枚1枚の木に1ページ全部を彫ってあるもので、それで印刷していたという江戸時代が一番ポピュラーなやつです。

これは勘亭流みたいなものです。



こんな字もありました。



京都に行くと、こういう本が売っているんですよ。結構安く。ただ、ぼろぼろですけどね。

これが勘亭流や寄席文字というような「江戸文字」につながっていきます。

活字になると、こういうふうになります。

これが中国から明治2年に渡ってきた明朝体の印刷物です。黎明期に中国から渡ってきた明朝体の漢字と連綿体を分解して、一個一個の平仮名にして組み上げたやつです。変体仮名もすごいでしょ。読めないでしょう。

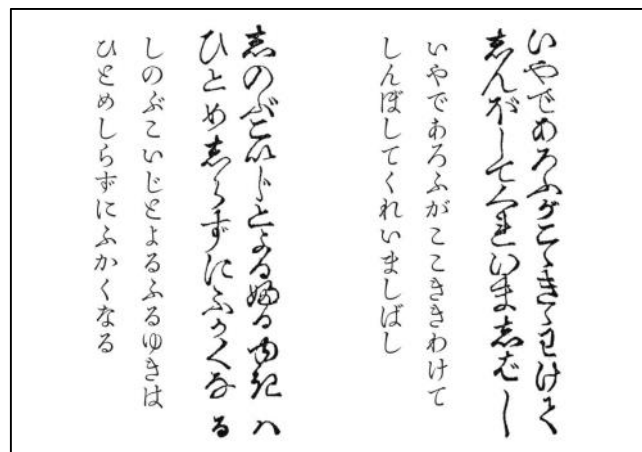
こういうのを見せると、若い子は「かわいい！」とか言ったりするんです。わけわからんです。(笑)

これが明治30年ぐらいにできた、今とあまり遜色ない感じの組みなんです。

これは明治33年あたりのもので、活版印刷なので、あまりきれいな画質ではないんですけども、この仮名のスタイルはとても日本人が好きなようで、このスタイルを真似した書体を私たちも作っているし、他の会社さんも作っています。

だから、活字は100年持つと言われますが、本当にそのとおり、良いものは多少スタイルは変わるものの継承されていきます。

右は木に彫ったもので、左が活字です。木に彫ったものと、このでき上がる活字を見ていったときに、時代は違うんですけども、結構似ていると思いませんか？



この「や」とか、「あ」とか、「ろ」とか、「ふ」とか。僕はそっくりだと思っちゃうんだけど、この「ま」とか。

だから、読みやすい文字というのは、歴史の上に成り立っていると考えています。自分ではこっちのほうが格好いいとかって作っている文字は、実はあまり読みやすいものではないことがほとんどです。

4 UD フォント

最後に、UDフォントの話をいたします。

皆さん、UDフォントって聞いたことがありますか？UDはユニバーサルデザインの略です。

UDフォント、絶対これからUDフォントを使うべきだと言う人、いますか？どうでしょう？

なぜこれができたかという、はじめはパナソニックが商品開発に伴って提案したものです。高齢者がテレビのリモコンの数字を、例えば3と8とか、6と8と9を間違える。

目が悪くなると、区別がつかなくなるらしいです。

3や6や9をぐるっと巻かない。ぐるっと巻かないことによって、ちょっとぼやけて見ても間違わないということから始まった文字なんです。

この考えを漢字とか仮名、アルファベットにも生かそうと考えたわけです。

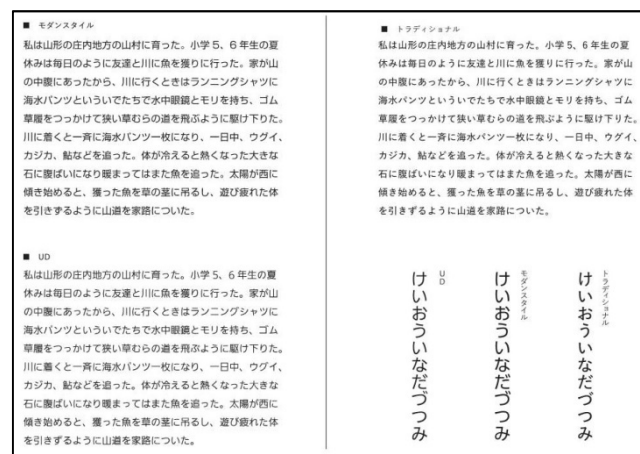
そこで国構えなどの口の縦線が下に突き出た部分を下駄と言いますが、その下駄を取って文字を高くして大きくしました。文字を大きくしたら見やすい、読みやすいという発想です。

例えば、視力検査をするときに、あの輪っかが大きければ見やすいですね、絶対。だから、小さいよりは大きいほうが見やすい。これは当たり前です。

ただ、大きい文字は見やすく、読みやすいのか。

文章というのは、文字が連なってできているわけですね。この「連なる」というのは、四角いボディが連なっていくわけで、そのボディの中に文字を大きくデザインするんです。

これはある会社のUDフォントです。こんな感じ。大きくすると、こんな感じ。どうですか。これは読みやすいですか。



スタイルとしては、これがモダンスタイルで、これがトラディショナルで、これはUDということなんですけど、どれが読みやすいでしょうか。

実はトラディショナルは、私たちがつくっている書体なんです。モダンスタイルは、弊社の親会社がつくっている書体で、京王線の駅の柱の駅名にこれを使っています。縦に組んであります。

これで「けいおういのだづつみ」って書いてあるのね。読めないでしょ。少なくとも読みづらいです。

先ほど話したように、縦のつながりがないんです。ゴシックは大体、縦のつながりは希薄なんですけれども、トラディショナルのほうが多少はあるんです。

ただ、これは横組みに弱いんです。ちょっとパラパラ感があるじゃないですか。モダンスタイルとUDフォントは詰まった感がある。でも、この詰まった感は、例えばこれがこのくらいの文章だったらいけるけど、これが1ページ全部この文字

になったことを想像してみてくださいよ。これで本を読む？何か息抜きができない、そんな感じがしませんか？

僕、中国にたまに行きますが、中国へ行くと漢字だらけなんですよ。当たり前だけど。

当たり前だけど、北京の駅には「北京」と書いてあるんだけど、駅のビルの上に「北京」と書いてあるのね。あの文字の大きさは一辺が5メートルくらいあるんじゃないか。マンションの2階分ありそうな、そういう漢字があちこちにあるんです。北京に1週間いると、ほんとうに辛い。漢字が迫ってきて、息苦しくなる。押しつぶされそう。

そのとき、僕は仮名が見たいと思ったんですよ。仮名はいいです。仮名は癒し系です。(笑)

こういうのを見ると、息苦しい感じを僕は抱くんですね。何か余裕のない今の日本みたいだなんて思っちゃったりするわけですよ。

そういうUDが今、すごくはやってきています。

UDという名前がついているだけで、これはUDを使っているから誰もが読みやすいはずだと思うのはご法度です。

これは、UDを検証している慶應義塾大学の先生とか3人の先生が同じことを話していましたが、UDはあくまで選択肢の一つだと、UDを使っていれば何でもオーケーというのは、それはすごくよくないと。だから、選択肢の1つ。

実際にロービジョンの人に話を聞いても、ロービジョンの人は1種類の人たちじゃないので、私はこっちのほうが読みやすい、私はこっちのほうが読みやすいというふうに言っていて、ゴシックが読みやすい人と明朝のほうが読みやすい人がいるんだということを言っておりました。

だから、それを「ユニバーサルデザイン」という、誰もが読みやすいものと勘違いさせるような名前をつけるとは良くないと僕は思っています。

なので、僕は、今考えているのは、もっと多くの人に一番読みやすい状態になるような可変するタイプデザインというものを提案できたらいいなと思っています。

本日の話は以上です。ありがとうございました。

《質疑応答》

○参加者A氏 私は、大活字本の出版を10年以上、やっています。今日、UDフォントの話を伺いまして、ロービジョン向け、あるいは高齢者向けのフォントということで可変するものを先生が考えられていると伺いました。企業秘密でなければ、許される範囲で可変するフォントというのはどういうイメージで考えられているのかをお聞きしたいと思います。

○鳥海 全部、企業秘密なんです。現在実現に向け、鋭意制作中なのでご容赦ください。



○参加者B氏 公立図書館に勤めています。公共機関ですと、事務用のPCにはデザインのソフト等が用意されておらず、実質的にはWindowsに元から入っているフォントを使うしかありません。

Wordでデザインする上で気をつけることを教えていただければ大変ありがたいです。

○鳥海 先ほどお話ししましたが、文字を大きくすることが読みやすいとは限らないのです。

例えば、ちょっとだけ小さくして行間を空けたほうが読みやすかったりします。

次に、きれいに見える書体と読みやすい書体は違うということ、これを知っておいてください。

例えば、今の書体は仮想ボディという四角の中に文字をデザインします。仮想ボディが連なっていくわけです。

そのときに、例えばこんなふうな書体なんです、今の書体は。これは例えば「り」は細長くとか、「へ」は平べったくというのは、昔から平安時代からほぼ当たり前につくられていた形がこっちなんです。

で、この四角の中に文字を入れるようになって、これだと、ここが空いちやうじゃないですか。なので、それを空かないように無理やり横に広げて文字をつくるんです。

それを僕は「モダンスタイル」と呼んでいますけど、これは並べたときはラインが揃って何となくきれいに見えるんだけど、こっちのほうが読みにくいです。

PCには、フォントがいくつか入っているんだから、同じ文章を書体を変えて打ち出して、それで検討すればいいと思いますよ。それで何人かに聞いてみればいいものになりますよ。

○参加者C氏 建築の設計が専門で、時々、大学でも授業をします。

今の話に関連しますけれども、見出しと本文との違いはどうでしょうか。どういうことを特に設計上、工夫をされていらっしゃるのでしょうか。

○鳥海 本文書体は読みやすいということなので、長文で読みやすい。なので、伝統的なスタイルを踏襲してやっていきますけれども、見出しは目を引くということが第一目的になっていきます。

例えば、この記事が誰を対象にしているかによって、かわいくしようとか、いかめしくしようとか、強く見せようとか、繊細に見せようとか、見出しのスタイルというのは本当にいっぱいありま

す。ここが大きな違いですね。

だから、見出し書体は個性が強い。本文書体は読みやすい。長文で読みやすいことが主体となるので、それほど個性を出さないことになります。

ですから、本文書体を大きくして見出しに使うと、何か気の抜けた感じでおもしろくないということになってしまうかもしれませんね。その違いだと思います。

時間になりましたので、これで終わりにします。
ありがとうございました。(拍手)

〈事務局注〉

※1 片岡薫『鉄眼 一切経刻版に賭けた生涯』ヘラルド・エンタープライズ 1982

※2 林進『宗達絵画の解釈学—『風神雷神図屏風』の雷神はなぜ白いのか』敬文舎 2016